

## 調査報告

## 高齢者とジェンダー —独居後期高齢者実態調査45ケースについて—

Elderly and Gender : Report on the 45 Elderly Peoples Living Alone in the Latter Stage

松 成 恵  
Megumi MATSUNARI

### 研究目的

戦後日本における家族変動を分析する枠組みとしては、「直系家族制から夫婦家族制への変動」という類型の変化で把握してきたことは、大方の賛同をえられている。<sup>1) 2) 3) 4)</sup>しかしながら、1990年代に夫婦家族制は定着したと考えられ、それ以後の家族変動をどのように把握するかが課題として提示された。またここでいうところの夫婦家族制は、男女の性別役割分業を前提とするものであった。したがって、1990年代以降において、変動する家族を分析する枠組みを構築するには、まずは、緻密な実態調査から始めるほかないと認識がある。<sup>5) 6) 7) 8)</sup>

また、昨今では、問題家族を病理ととらえる立場よりも、家族問題のノーマライゼーションとして認識することが一般化している。<sup>9)</sup>したがって、実態調査をする場合に老親扶養の問題に焦点を絞った。家族とは何かを問う場合、老親扶養もその中核をなすからである。なかでも、独居後期高齢者の増加が予想され、一層深刻な問題となっている。<sup>10) 11)</sup>

以上のような問題意識を背景として、独居後期高齢者の事例研究が1999年にスタートした。1999年(4名)、<sup>12)</sup>2000年(5名)、<sup>13)</sup>2001年(7名)、<sup>14)</sup>2002年(9名)、<sup>15)</sup>2003年(5名)、<sup>16)</sup>2004年(5名)、<sup>17)</sup>2005年(5名)、<sup>18)</sup>2006年(5名)、<sup>19)</sup>の合計45名である。

またこのような実態調査は、実践的課題にもこたえうるものである。財政的限界、行政的福祉政策の限界が顕著な今日において、家族を支える地

域社会づくり、地域福祉政策の重要性はいうまでもない。そのなかでも、ボランティアによるサポート・ネットワーク構築の可能性を探ることは特別重要といえよう。<sup>20) 21) 22)</sup>

しかしながら、独居後期高齢者の実態調査を重ねていく過程で、高齢者問題も決してジェンダーの問題とは無縁なものではないことも明らかになった。<sup>23) 24)</sup>したがって、本報告では、独居後期高齢者と別居子との関係、そのうちでも特に息子と娘との関係性の内容、性差に焦点をあてて分析した。<sup>25)</sup>

### 研究方法

調査地は、交通の便、調査協力などを考慮して、山口市の1地区が選ばれた。この地区には、独居後期高齢者が、百数十名いる。そのうち、民生委員の方々から推薦いただいた人が自動的に調査対象者になっている。調査対象者になることを承諾するという点で階層差があることは十分承知している。また、調査時点に7年の幅があるものを一覧にして分析している点も注意をはらわなければならないことを認識している。

調査方法は、ライフコースアプローチを採用し、家族歴、職業歴、健康状態、友人関係、近隣関係、親族関係、趣味や楽しみ、子どもとの関係、将来のことなど、生活全般について自由に語ってもらっている。質問する大項目は決めているが、基本的には非構造調査である。調査対象者から録音することの了承を得て、一人2回、合計3時間から5時間インタビューした。<sup>24)</sup>

### 研究結果

まず、調査対象者の概要であるが、調査年、ケース番号、性別、年齢、出身県に関する一覧表が、表1である。

表1の内容に加えて、主たる職業、寡婦（夫）期間などについて、男女比別に示したものが表2、表3、表4、表5である。

表2については、75歳から85歳未満と80歳以上がほぼ同数であり、男女比は女性が多い。表3に

ついては、出身県は男女とも山口県が多い。表4については、女性において、専業主婦は少なく、勤務歴のある人が多い。表5については、寡婦（夫）歴が10年未満の場合、男女合わせて18名いる。10年以上の場合、男女合わせて26名いる。寡婦（夫）歴の長い人が多いといえよう。

次に、老親扶養を論ずる場合、まず子どもとの関係が明らかにされていなければならない。したがって、子どもの有無について、男子がいる場合

表1 調査年・ケース番号・性別・年齢・出身県

調査年	ケース番号	性別	年齢	出身県	調査年	ケース番号	性別	年齢	出身県
1999年	1	女性	74歳	山口県	2003年	26	女性	76歳	山口県
	2	男性	76歳	山口県		27	女性	77歳	山口県
	3	女性	82歳	山口県		28	男性	78歳	山口県
	4	女性	85歳	山口県		29	女性	82歳	山口県
2000年	5	女性	74歳	山口県		30	女性	83歳	山口県外
	6	女性	75歳	山口県	2004年	31	女性	74歳	山口県
	7	女性	77歳	山口県		32	男性	78歳	山口県
	8	女性	84歳	山口県		33	女性	81歳	山口県
	9	女性	89歳	山口県外		34	女性	83歳	山口県
2001年	10	女性	75歳	山口県		35	女性	86歳	山口県
	11	女性	75歳	山口県	2005年	36	男性	77歳	山口県
	12	女性	78歳	山口県		37	男性	81歳	山口県
	13	女性	80歳	山口県		38	女性	83歳	山口県外
	14	女性	81歳	山口県		39	女性	83歳	山口県
	15	女性	83歳	山口県		40	女性	88歳	山口県外
	16	女性	87歳	山口県外	2006年	41	女性	75歳	山口県
2002年	17	女性	75歳	山口県		42	女性	76歳	山口県
	18	女性	75歳	山口県		43	女性	77歳	山口県
	19	男性	78歳	山口県		44	男性	79歳	山口県
	20	男性	78歳	山口県		45	女性	86歳	山口県
	21	女性	81歳	山口県外					
	22	女性	84歳	山口県外					
	23	男性	87歳	山口県					
	24	男性	88歳	山口県					
	25	女性	89歳	山口県					

表2 性別・年齢

	男性	女性	計
75歳以上80歳未満	7	15	22
80歳以上	3	20	23
計	10	35	45

\*74歳を2名含む。

表3 性別・出身県

	男性	女性	計
山口県	10	28	38
山口県外	0	7	7
計	10	35	45

と男子がいない場合にわけ、さらに男女の構成別に示したものが表6である。男子がいる場合が38ケース、男子がいない場合が7ケースである。当時の既婚女性は、男子が生まれるまで頑張ったといえるかもしれない。

さらに、男子がいる場合と男子がいない場合にかけて、「家」の跡取りを聞いている。表7から明らかなように、男子がいる場合は、病気や死亡、離別を除けば、すべて、長男か次男であって33ケースにのぼる。ここに伝統的な「家」意識の残存が観察される。

次に、独居後期高齢者が取り結ぶ別居子との関係性の内容を息子と娘、すなわち性別による違いに注目して分析した。そのために、つぎのようにケースを分類した。

- ①男子がいる場合で跡取りを長男と決めておりかつ将来のことを長男に期待する場合。
- ②男子がいる場合で跡取りを長男と決めているが将来のことを長男に期待しない場合。
- ③男子がいる場合で跡取りが長男以外の場合。
- ④男子がいない場合。

表4 性別・主たる職業歴

	男性	女性	計
民間企業勤務	3	14	17
専業主婦	0	14	14
公務員	6	3	9
農業	1	3	4
公務員と専業主婦	0	1	1
計	10	35	45

表5 性別・寡婦(夫)期間

	男性	女性	計
10年未満	3	15	18
10年以上20年未満	3	7	10
20年以上30年未満	4	4	8
30年以上40年未満	0	2	2
40年以上50年未満	0	1	1
50年以上	0	3	3
戦争未亡人	0	2	2
離別	0	1	1
計	10	35	45

①が8ケース、②が22ケース、③が8ケース、④が7ケースである。

別居子との関係性の内容を息子と娘という性差に焦点をあてるのが目的であるから、男子のいない場合の7ケースは、非該当になるため、以下の分析から除いた。

①については表8、②については表9-1、9-2、③については表10に示した。

はじめに、表8である。表8は、男子がいる場合で、跡取りを長男と決めておりかつ将来のことを長男に期待している8ケースについてである。将来のことを長男に期待するものの、長男は8ケース中、7ケースが他県在住で遠居といえる。したがって、調査対象者がすでに75歳以上であることを考えると、同居による老親扶養は期待しが

表6 子どもの有無

男子がいる場合		男子がいない場合	
一男	1	一女	2
一男(養子)	2	一女(養女)	2
一男(離別)	1	一女(離別)	1
二男	3	二女	2
三男	1	小計	7
一男一女	15		
一男二女	6		
一男三女	1		
二男一女	4		
二男二女	2		
二男三女	1		
二男四女	1		
小計	38		

表7 跡取り

男子がいる場合		男子がいない場合	
長男	30	次女	1
次男	2	養女	1
長男か次男	1	孫に期待	1
長男死亡で孫に	1	言及せず	4
長男死亡で言及せず	1	小計	7
長男死亡で思案中	1		
長男病気で言及せず	1		
長男離別で思案中	1		
小計	38		

表8 男子がいる場合・跡取りが長男・長男に期待する・8ケース

番号	性別	年齢	子どもの有無	跡取り	子どもの所在地	子どもとの距離	将来について	介護の可能性	関係性の内容
1	女性	74歳	一男一女	長男	長男・他県	遠	長男に期待	×	来るように言うが都会生活に踏み切れない。
					長女・他県	遠		○	体調が悪いとき10日ばかりいく。
5	女性	74歳	一男二女	長男	長男・他県	遠	長男に期待	×	来いといわれても行かない。
					長女・他県	遠		×	勤めていて次女ほどはあてにできない。
					次女・他県	遠		○	何かあれば新幹線で来てくれる。
14	女性	81歳	二男	長男	長男・他県	遠	長男に期待	非該当	
					次男・他県	遠		非該当	
21	女性	81歳	二男二女	長男	長男・他県	遠	長男に期待	×	責任感があるので帰ってきてくれるだろう。
					次男・他県	遠		×	それぞれの生活があって帰ってこないだろう。
					長女・他県	遠		×	それぞれの生活があって帰ってこないだろう。
					次女・県内	中		○	次女は月一回訪ねてくれる。
23	男性	87歳	一男二女	長男	長男・他県	遠	長男に期待	×	年2, 3回帰ってくる。
					長女・県内	中		○	姉と妹で土曜日から日曜日までよく訪ねてくれる。
					次女・県内	中		○	次女夫婦が、面倒をみるといってくれる。
28	男性	78歳	二男	長男	長男・他県	遠	長男に期待	非該当	
					次男・他県	遠		非該当	
31	女性	74歳	一男一女	長男	長男・県内	中	長男に期待	×	来るように誘いがあるが家を離れたい。
					長女・市内	近		○	長女は週1回訪ねてくれる。
34	女性	83歳	一男三女	長男	長男・他県	遠	長男に期待	×	あまり帰ってこない。
					長女・市内	近		×	月一回程度くる。
					次女・市内	近		○	次女は週末に来て、買い物などしてくれる。
					参女・市内	近		○	三女も週一回ほど来てくれる。

表9-1 男子がいる場合・跡取りが長男・将来長男に期待しない・22ケース

番号	性別	年齢	子どもの有無	跡取り	子どもの所在地	子どもとの距離	将来について	介護の可能性	関係性の内容
3	女性	82歳	二男四女	長男	長男・市内	近	施設希望	×	何かあれば駆けつけてくれる。
					次男・市内	近		×	何かあれば駆けつけてくれる。
					長女・他県	遠		○	娘のほうに気兼ねなく何でも話せる。
					次女・他県	遠		○	娘のほうに気兼ねなく何でも話せる。
					参女・他県	遠		○	娘のほうに気兼ねなく何でも話せる。
					四女・他県	遠		○	娘のほうに気兼ねなく何でも話せる。
4	女性	85歳	一男一女	長男	長男・市内	近	長男との同居希望せず	×	時々来てくれる。
					長女・市内	近		○	毎日夕方には歩いて訪ねる。
6	女性	75歳	一男一女	長男	長男・日本と韓国	遠	施設希望	○	長男は未婚。関係は良好。
					長女・他県	遠		×	舅を山口に残しているのを見てもらえない。
7	女性	77歳	一男(養子)	長男	長男・市内	近	長男との同居希望せず	非該当	
8	女性	84歳	一男	長男	長男・市内	近	施設希望	非該当	
11	女性	75歳	一男二女	長男	長男・市内	近	施設希望	×	同居したことがあるがうまくいかなかった。
					長女・市内	近		○	長女は歩いて10分、毎日行き来きがある。
					次女・他県	遠		○	長女と次女と旅行に行く。
12	女性	78歳	一男一女	長男	長男・他県	遠	施設希望	×	仕事があるから帰れとはいえない。
					長女・他県	遠		○	電話でよく話しをする。娘のほうに話がやすい。
13	女性	80歳	一男一女	長男	長男・市内	近	施設希望	○	長男は週一回訪ねてくれる。優しい。
					長女・市内	近		×	働いているので用事をたのみにくい。
16	女性	87歳	一男一女	長男	長男・県内	中	長男との同居希望せず	×	別居によって関係は良好。
					長女・県内			○	長女との関係は良好。
17	女性	75歳	一男一女	長男	長男・県内	中	施設希望	×	仕事がいそがしくゆっくりしていくことはほとんどない。
					長女・他県	遠		○	電話でよく話しをする。娘のほうに話がやすい。
19	男性	78歳	一男一女	長男	長男・市内	近	施設やむなし	×	単身赴任中。嫁は同居を望んでないだろう。
					長女・市内	近		○	長女は、歩いて10分、月1回ほど訪ねてくる。
24	男性	88歳	二男二女	長男	長男・市内	近	長男との同居希望せず	×	来なさいといわれるが一人がよい。
					次男・他県	遠		×	不明
					長女・他県	遠		×	不明
					次女・市内	近		○	次女は週一回、野菜などもって来てくれる。

表9-2 男子がいる場合・跡取りが長男・将来長男に期待しない・22ケース

番号	性別	年齢	子どもの有無	跡取り	子どもの所在地	子どもとの距離	将来について	介護の可能性	関係性の内容
26	女性	76歳	二男一女	長男	長男・市内	近	長男と同居希望せず	×	長男がなんとかするだろう。
					次男・他県	遠		×	次男は正月には家族でよく帰ってきた。
					長女・市内	近		×	一緒に住もうとは言わないし、自分も考えていない。
29	女性	82歳	一男(養子)	長男	長男・県内	中	できるだけ自宅で	非該当	
30	女性	83歳	一男一女	長男	長男・市内	近	施設希望	×	週一回は来る。
					長女・市内	近		○	長女は毎晩電話があり、休日、会って食事する。
35	女性	86歳	三男	長男	長男・県内	中	できるだけ自宅で	非該当	
					次男・他県	遠		非該当	
					参男・死亡	非該当		非該当	
37	男性	81歳	二男一女	長男	長男・市内	近	できるだけ自宅で	不明	土日は長男宅で夕食を食べる。
					次男・市内	近		不明	自分の車で行って泊まることもある。
					長女・市内	近		不明	習い事のあと立ち寄る。
40	女性	88歳	一男二女	長男	長男・他県	遠	最後まで自宅で	×	定年後帰ってくる話がある。
					長女・他県	遠		○	長女は毎日電話をくれ、不安時話を聞いてもらう。
					次女・他県	遠		×	3日に1回くらい電話がある。
41	女性	75歳	一男一女	長男	長女・市内	近	できるだけ自宅で	○	長女は何かあったらすぐ来てくれる。
					長男・他県	遠		×	姉が近くにいるので安心している。
42	女性	76歳	二男一女	長男	長男・死亡	非該当	できるだけ自宅で	○	長男は50歳で死亡。嫁と毎日行き来がある。
					次男・他県	遠		×	遠方でなかなか帰ってこれない。
					長女・県内	中		○	帰っても看るといってかれている。
43	女性	77歳	一男一女	長男	長女・他県	遠	このまま自宅で	×	正月には孫が年末から一人でくる。
					長男・市内	近		不明	息子は単身赴任中。正月は息子家族がくる。
44	男性	79歳	一男一女	長男	長男・他県	遠	このまま自宅で	×	盆、正月、家族で帰ってくる。一緒に旅行に行く。
					長女・市内	近		○	良くしてくれるが妻には及ばない。

表10 男子がいる場合・跡取りが長男以外・8ケース

番号	性別	年齢	子どもの有無	跡取り	子どもの所在地	子どもとの距離	将来について	介護の可能性	関係性の内容
2	男性	76歳	一男一女	長男の子	長男・死亡	非該当	施設希望	非該当	
					長女・市内	近		非該当	
9	女性	89歳	二男三女	次男	長男・他県	遠	次男と同居希望せず	×	不明
					次男・市内	近		○	次男は毎晩泊りに来る。
					長女・市内	近		○	長女は毎日通って援助している。
					次女・他県	遠		×	不明
					参女・他県	遠		×	不明
15	女性	83歳	二男一女	次男	長男・他県	遠	次男に期待	×	長男の嫁との行き来はない。
					次男・他県	遠		×	次男が家を継ぐことになっている。定年まで数年ある。
					長女・県内	中		○	長女は、米や野菜をよく届けてくれる。
20	男性	78歳	一男二女	言及せず	長男・病氣	非該当	できるだけ自宅で	非該当	
					長女・県内	中		非該当	
					次女・他県	遠		非該当	
25	女性	89歳	一男二女	言及せず	長男・死亡	非該当	施設希望	非該当	
					長女・死亡	非該当		非該当	
					次女・市内	近		非該当	
32	男性	78歳	一男(離別)	思案中	長男・離別	非該当	できるだけ自宅で	非該当	
33	女性	81歳	二男	どちらか	長男・市内	近	施設希望	非該当	
					次男・市内	近		非該当	
36	男性	77歳	一男一女	思案中	長男・死亡	非該当	できるだけ自宅で	非該当	
					長女・他県	遠		非該当	

たい。対象者が「将来のことを長男に期待する」というのは、単なる淡い願望かあるいはそうあるべきというような建前であるといえよう。次に、この8ケースについて、その他の別居子との関係を見ると調査対象者の表現のなかに、娘との情緒的絆の深さが観察される。<sup>25) 26) 27)</sup> 跡取りは長男であるが、情緒的な絆の深さは晩年娘が調査対象者の介護を担う可能性を示唆している。

次に表9-1、9-2である。表9-1、9-2は、男子がいる場合で、跡取りを長男と決めているが、将来のことを長男に期待しない22ケースについての一覧である。男子と女子の比較に焦点をあてているので、子どもが男子のみの4ケースは非該当となる。また、子どもには男女いるが、それぞれについて、情緒的な絆の関する言及がない場合、不明としたケースが2ケースある。残り16ケースについて分析すると、関係性の内容からみて、男子の方が情緒的絆において深いと観察しうるケースが2ケースあった。ケース番号6と13である。残る14ケースについては、やはり女子との情緒的絆が強いといえよう。

次に、表10である。表10は、男子がいる場合で、跡取りが長男ではない場合である。このタイプは、長男が、死亡、病気、離別、などの理由で非該当が5ケースある。男子だけのケースが1ケースある。残る2ケースのうち、1ケースのみ女子との情緒的絆が深いと観察される。

## 考察

もともと「家」の継承とは、家名、家産、家業、土地、家屋、墓など様々な要素を含んだものの継承であり、「家」の跡取りとは、家督相続によってそれらすべてを基本的には、一子単独相続するものであった。したがって、家督相続と老親扶養は分かちがたく一体のものであった。また家系は、一般に男系であり単系であった。しかしながら、今日では、「家」の跡取りに期待されていることは、家屋や土地、家名の継承を含む場合もあるが、多くは墓、仏壇、先祖供養等の継承であり、かならずしも同居による老親扶養は期待されていない

か、もしくは、期待しても実現の可能性は低い。また、老親扶養という概念は、老親の生活のすべての支援を含むものであって、単に経済的援助のみをさすものではない。便宜的には、おおむね4つの側面にわけて分析される。それは、経済的援助、身体的介護、情緒的援助、価値欲求の充足である。これらは互いに分かちがたく結びついている。しかしながら、社会保障制度や医療制度、また介護保険制度などが十分とはいえないまでも、ほぼ整えられた現状では、出来るだけ、自宅でこのままの生活を続けたいとする高齢者が多数であった。その場合、最晩年をささえる子は誰かということをおのずと関係性の内容において情緒的絆の深さが観察される子すなわち娘が登場する。ここに、「家」の跡取りとしては男子が選択されているが、実際晩年を支えるであろうと推定されるのは女子という性別のねじれが観察される。

「家」の継承は、伝統的には相続と一体のものであった。したがって、このねじれは、将来、遺産相続をめぐる問題が生じる可能性をはらんでいる。また、介護を完全には娘に任せきれないという点で、高齢者の生活の質の向上にとっては足かせとなる可能性がある。

筆者は、長年研究のテーマとして、社会変動と社会意識の変動のギャップに関心をもってきた。<sup>28) 29) 30)</sup> 本研究でも、家族変動と家族意識の変動にギャップが観察された。すなわち、「家」の継承は男子とする一方で、老親扶養の規範においては新しい規範が確立されたとはいえない。そのことは、親世代も子世代にも共通して観察された。今後予想される問題に対応することは、政治的、行政的、教育的課題といえよう。また、地域でのボランティアによるサポート・ネットワーク構築の必要性は緊急の課題であることは明らかであるが、その可能性はということになると非常に困難な課題といえる。

## 注・参考文献

- 1) 森岡清美、「戦後の家族構成の変化と家意識

- の崩壊』、『歴史公論』、50号、122-127、1980
- 2) 石原邦雄、「戦後日本の家族意識」、『家族史研究 6号』、大月書店、118-139、1982
  - 3) 松成 恵、「戦後日本の家族意識の変化—全国規模の世論調査報告を資料として—」、『家族社会学研究』、第3号、85-97、1991
  - 4) 森岡清美、『現代家族変動論』、ミネルヴァ書房、1993
  - 5) 森岡清美、「コメント1 家族社会学のパラダイム転換をめざして」、『家族社会学研究』、第10巻、第1号、139-144、1998
  - 6) 落合恵美子、「コメント2 新しいパラダイムの課題」、『家族社会学研究』、第10巻、第1号、145-150、1998
  - 7) 松成 恵、「家族の定義・類型・変動・パラダイム転換」、『出会いの知的生態学』森岡清美先生喜寿記念誌編纂委員会編、98-106、2000
  - 8) Gubrium Jaber F. and Holstein James A. What is FAMILY? Mayfield Publishing Company (1990=1997、中河伸俊、湯川純幸、鮎川潤訳『家族とは何か—その言説と現実』新曜社)、田淵六郎によると、この著書は、社会構築主義からの家族の定義を巡る一つの申し立てとして位置づけられる。田淵六郎、『家族社会学研究』、第10号、第2巻、152-154、1998
  - 9) 安達正嗣、「第6章 高齢者と家族・親族ネットワーク」、『いま家族に何が起っているか』、ミネルヴァ書房、118-135、1996
  - 10) 藤崎宏子、『高齢者・家族・社会的ネットワーク』、培風館、1998高齢者の事例研究を詳細に報告しているが、後期高齢者の事例は、少数である。
  - 11) 原田 謙、杉澤秀博、浅川達人、斎藤 民、「大都市における後期高齢者の社会的ネットワークと精神的健康」、『社会学評論』、Vol.55、No.4、434-447、2005
  - 12) 松成 恵、「家族社会学のパラダイムシフト—独居後期高齢者事例研究—」、『山口県立大学生生活科学部研究報告』、26号、19-24、2000
  - 13) 松成 恵、「老齢に伴う親子同居のタイミン
  - グー独居後期高齢者事例研究—」、『山口県立大学生生活科学部研究報告』、27号、19-30、2001
  - 14) 松成 恵、「家族と介護—独居後期高齢者事例研究—」、『山口県立大学生生活科学部研究報告』、28号、47-56、2002
  - 15) 松成 恵、「高齢者の人間関係—独居後期高齢者事例研究—」、『山口県立大学生生活科学部研究報告』、29号、49-59、2003
  - 16) 松成 恵、「高齢者の楽しみ・生きがい—独居後期高齢者事例研究—」、『山口県立大学生生活科学部研究報告』、30号、67-75、2004
  - 17) 松成 恵、「高齢者と地域社会—独居後期高齢者事例研究—」、『山口県立大学生生活科学部研究報告』、31号、57-64、2005
  - 18) 松成 恵、「高齢者と社会的支援—独居後期高齢者事例研究—」、『山口県立大学生生活科学部研究報告』、32号、61-70、2006
  - 19) 松成 恵、「家族と介護—山口市M地区における独居後期高齢者実態調査40ケースから」、『西日本社会学会年報』、第5号、169-180、2006
  - 20) 松下育夫、「第5章 高齢者福祉施設におけるボランティアセクターの意義」、『現代社会と社会福祉』、学文社、81-101、2005
  - 21) 松下育夫、「第6章 住民主体型福祉NPOへの変遷とその有効性」、『現代社会と社会福祉』、学文社、103-131、2005
  - 22) 高野和良、「高齢社会における社会組織と生きがいの地域性」、『生きがい研究 9』、財団法人 長寿社会開発センター、69-89、2003、多様な中間集団の重要性について述べている。
  - 23) 目黒依子、「個人、ジェンダー、家族」、『家族社会学研究』、第16巻、第1号、5-6、2004、個人を分析単位とすることが個人のジェンダー性に焦点を当てることにつながることを指摘している。
  - 24) 目黒依子、「第15章 ジェンダーと家族変動」、『家族社会学のパラダイム』、268-279、2007、女性の意識の変化が家族の変動と連動しさらに社会変動とも連動するという分析モデルを提供

している。

- 25) Kahn,R.L.& Antonucci,T.C., “Convoys of Social Support: A Life-Course Approach,” in Kiesler,S.B.etal.(eds.), Aging:Social Change,Academic Press,383-405,1981、カーンとアントヌッチは、人々がその人生行路の各ステージにおいて形成する人々の網の目をコンボイと呼んだ。本報告の対象者も加齢に伴って、そのような社会的ネットワークが、身近な人々に限られていく様子が観察された。
- 26) インタビューの第1回目はすべて筆者が行った。第2回目は、それぞれの調査年度の卒業研究の一環として学生が行った。学生たちの許可をえて、インタビュー内容を参照させていただいている。
- 27) 水嶋陽子、「老齡期親子における交渉と親しい関係」『家族研究年報』、27、63-74、2002、都市部の高学歴女性が、子ども、特に娘あるいは娘的存在（嫁や姪）との介護をめぐる交渉過程の結果、彼女たちから自己の存在承認の役割を獲得していることを報告している。
- 28) 水嶋陽子、「高齢女性と選択的親子関係」『家族社会学研究』、10（2）、83-94、1998、大都市部における高齢女性が、高齢期において、子どもとの関係を柔軟に、かつ選択的に形成していることを事例研究から報告している。
- 29) 森岡清美「5章 異居近親関係の研究」『発展する家族社会学』有斐閣131-171、2005、米国の1960年代の拡大親族的活動は妻がより積極的で母系的傾向がみられることを指摘している。
- 30) 松成 恵、「農村家族における15年間の家族意識の変化」、(第一報)、『山口女子大学研究報告』、第14号、39-51、1989
- 31) 松成 恵、「農村家族における15年間の家族意識の変化」、(第二報)、『山口女子大学研究報告』、第15号、51-64、1990
- 32) 松成 恵、「アメリカにおける男女平等意識のコーホート分析」、『山口女子大学研究報告』、第20号、1-12、1994

## Elderly and Gender :Report on The 45 Elderly People Living Alone in The Latter Stage

Megumi MATSUNARI

### Summary

The purpose of this report is to clarify the problem of the gender in the life of the elderly.It is based on a case study of the 45 elderly people living alone who are in the latter stage of their aging.They are living at the one political unit in the Yamaguchi City. The study is conducted from 1999 to 2006.

The results are:

- (1)The elderly wish strongly to have their land and buildings and grave inherited by their eldest son because they hold the *ie* (family) traditional value in their mind.
- (2)The elderly rely on their daughters for daily assistance and emotional interaction.
- (3)The new social norm in regards to who is to continuously look after the parents in the latter stage of their aging is not enough established.
- (4)Therefore, the parent's generation does not have much freedom to choose the lifestyle available for them.
- (5)In the near future we must predict that their economic troubles will sprang from the sexual cross between son as the inheritor and the daughter as the career.

### 謝辞

1999年から2006年まで調査に協力いただいた皆様、また紹介の労を取ってくださった民生委員の皆様、心よりお礼申し上げます。